

I 部 枕崎市の歴史

第1章 「枕崎」の由来（成り立ち）や位置等

わたしたちの枕崎市は、なぜ「枕崎」と呼ばれるようになったのでしょうか。

明確な理由にははっきりしませんが、『枕崎市誌』には、次の3つの説があります。

① 昔、枕崎浦内に近瀬という瀬があり、ここに枕箱に入った小さな御神体が漂着したので、それを神社に祀り、以後この辺りを「枕崎」と呼ぶようになった。

② 昔、恵比寿様の御神体が箱枕の引き出しに入って、近瀬という瀬に流れ着いたので、その辺りを「枕崎」というようになった。

③ 沖合を通る船から見ると、地形が枕に似ているから、「枕崎」になった。

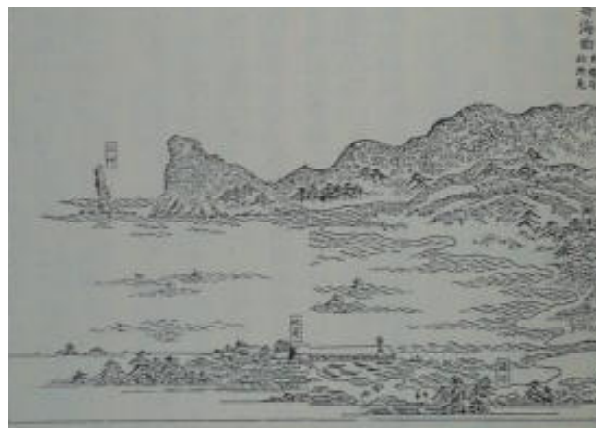


いずれにしても、「枕」が関係します。昔の枕は、主に使われたのは木枕系と薦枕系こもです。江戸時代になって、18世紀前半の頃から両者が一緒になった箱枕が生まれました。箱枕とは、木製の箱の上に小さな括枕くくり、俵形に作り、両側に房をつけたもの（をのせたもの）（『日本史大事典』平凡社）です。

もう1つの説があります。薩摩藩が編集した『二国名勝図会』(1843年完成)という本があります。その中の枕崎を扱った図(下写真)には、岬を中心にして人家が並び、その岬を「枕寄」寄は崎の異体字で、同じ漢字です)としています。つまり枕崎は、この岬の名前だということです。三島やトカラの島々では、暗礁や浅瀬のことを「マクラ」といいます。この付近は瀬が多く、枕崎のマクラは瀬を意味していると考えられます。実際、この付近には、瀬崎というあそ字もあります。

瀬が多い岬が転じて「瀬崎」が「枕崎」になったものと考えられます。

枕崎は、後述するように、江戸時代の頃までは単なる漁村に過ぎなかったことを考えると、最後の説が最も適切なように思います。



なお、「枕崎」という地名が文献に出てくるのは、江戸幕府の命令で作られた『元禄国絵図』（1697年完成）が最初だと考えられます。枕崎という地名は、およそ300年前のことです。

但し、枕崎は、昔は鹿籠かごと呼ばれていました（8ページ参照）し、今の枕崎全体を枕崎というのは、大正12（1923）年に「枕崎町」となってからです。

その他、枕崎市には、「立神」「桜山」「金山」「別府」の4小学校があります。

「立神」は、観光名所にもなっている沖の立神（右写真）から来ています。

立神・岩戸山（左写真）・硫黄島には、おもしろい次のような民話が残っています。

3者は、もともと仲のいい友だちだった。ある日、立神と岩戸山がケンカをした。立神は怒って火を投げつけたところ、岩戸山は燃えて赤く爛れただ、今の赤崩あかくれ・禿山ちんちよができた。岩戸山は仕返しに包丁（または鉞なた）を投げつけた。立神は身体を切り取られて沖に聳そびえ立っている。それ以来、この2つは互いに、にらみあったまま向かい合っている。その時、隣にいたのが硫黄島であ



る。硫黄島がケンカをしないように注意すると、立神が硫黄島めがけて櫓かいを投げつけたので、硫黄島は怒って、むくむくと煙を出しているのである。

桜山」は、江戸時代の枕崎の中心地は、今の桜山校区でしたが、小学校・中学校のところに桜之城」というお城がありました 21ページ参照）。

金山」は、その名の通り、江戸時代に金山が発見され、栄えたところ
です 19ページ参照 下写真は昭和10年頃の様子です）。

別府」は、奈良時代、国々に国司を置きましたが、その地を 国府」といい、国府の支所が置かれたところを 別府」といいました 38ページ参照）。別府という地名は、全国にあります。なお、俵積田という集落があります、貢米を貯蔵する倉庫があった」ためです。また、別府とは、未墾の地を開墾した所または私墾の地」という意味もあるといわれています。



また、行政区域としては、明治22年に、東鹿籠かご村、西鹿籠村、枕崎村、別府村の4村が合併して、東南方村みなかたになっています。その後、大正12年に枕崎町、昭和24年に枕崎市となりますが、このような関係から、枕崎市は、4つの大字 東鹿籠、西鹿籠、枕崎、別府）から成り、さらには1783

のこあざ小字があります。

下の地図を見てみましょう。何となく違う感じがしますが、普段見る地図とは南北が逆さまになっています。こうして見ると、南の海への玄関口、南の島々との関わり合いがよくわかります。

こうしたとらえ方は、枕崎の特徴・歴史を考えた時に、とても参考になります。

